

40 神経心理学的検査からみた行動評価

— 記憶検査を中心に —

病院 医療相談開発部心理 色井香織 四ノ宮美恵子 塩田玲子 土屋和子 富岡純子
田中大介 石原奈保子 研究所障害福祉研究部 嶋野麻里子

1. はじめに

高次脳機能障害の主症状の一つである記憶障害は、日常生活や社会生活を送る上で大きな支障となる場合が多い。そのため、記憶障害の程度や様相を把握した上で、どのような問題が起こりうるかを予測し、対処方法を検討していく必要がある。そこで当院心理では、高次脳機能障害を有する患者に対して複数の記憶検査からなるテストバッテリーを組み、検査を実施し、対処方法を検討している。昨年の業績発表会では、テストバッテリーに関して検討を行なった結果、そのうちの新指標（WMS-R とリバーミード行動記憶検査）は、旧指標（三宅式記銘力検査やベントン視覚記銘検査）の測定する記憶領域をおおよそ測定しうるということが明らかとなった。本発表では、社会行動の自立の第一歩ともいえる単独での通院について取り上げ、これら記憶検査によって実際に患者の行動を予測することが可能であるかを検証することを目的とする。

2. 方法

当院通院時公共交通機関の利用が可能であり、かつ WAIS-R、三宅式記銘力検査、リバーミード行動記憶検査（以下 RBMT とする）を同時期（一ヵ月以内）に実施している高次脳機能障害を有する患者 81 名について分析を行なった。今回は、WMS-R も同時に実施している患者数が少なかったため、WMS-R については分析から除外した。単独での通院の可否を基準変数、WAIS-R の言語性知能（VIQ）と動作性知能（PIQ）、三宅式記銘力検査の有関連正答数と無関連正答数、RBMT の標準プロフィール点の 5 変数を説明変数として backward 法によるロジスティック回帰分析を行った。

3. 結果と考察

RBMT と三宅式無関連正答数の 2 変数を説明変数とするモデルが採択された。このモデルの正判別率は 89.0% だった。ワルドの検定の結果、RBMT が有意な正の寄与を示すことがわかった ($\chi^2=14.97, p<.01$)。

以上により、RBMT の標準プロフィール点から、単独での通院の可否を予測することができることが明らかとなった。RBMT は、記憶障害から生じる日常生活上の問題を発見または予測し、経過や治療による変化を観察するために、実験室的な検査と日常生活のギャップを埋める検査として開発されたものである。今回の結果は、実際の日常生活行動を予測しているという点で RBMT の開発のねらいにかなったものといえる。今後さらにその他の日常生活行動を予測することが可能かどうか検証をすすめていくと同時に、予測された問題に対する対処方法の検討をすすめていきたい。